

2020 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 優秀賞

傾いた天秤 (原文は英語)

田野井 羚歌 (13 歳)

東京都

渋谷教育学園渋谷中学校

13 歳の私へ

数日前、アメリカで素朴な小さな町を車で通りかかった時、6 年生の集団を目にした。皆、アイスクリームを手に道を歩いている。金髪で白い肌の子はコーンの上で渦を巻いたダークチョコレートアイスをなめていた。黒い肌の子の手にはバニラアイスが握られていた。その集団の中には黄色い肌のアジア系の子もいて、バニラとチョコレートのミックスアイスを食べていた。アイスクリームを持っているのとは反対側の腕を互いに絡ませながら、無邪気で興奮した笑顔を顔いっぱいに浮かべていた。これは私が 2020 年に見たかった光景だ。でも、実際に見ているのは 2030 年だ。

いつものように、私はその瞬間を写真のように頭にはっきりと焼き付け、本のアイディアをまとめてあるノートに後で書き留めた。ライターである私は、絶えず何か面白い話はないかと目を光らせている。それと同時に、今話したような感動的で心が引きつけられる瞬間を描き、たくさんの人たちに読んでもらえるようにしたいと考えている。唯一最大の願いは、私のストーリーを読んだ人たちに感動してもらいたいことだ。私のストーリーがその人たちの心に残り、孫の代にまで伝わってくれることを私は心の片隅で祈っている。

2020 年の時のことを考えると、「イノセント・バット・ブラック (無罪、でも黒人)」という短いエッセーを書いていたあなた、ではなく、私のことを思い出す。そのエッセーで確かあなたは、1933 年頃を舞台にした『アラバマ物語』という小説の中で一人の黒人男性が犯してもいない罪に問われる様子について書き、さらに最後にこう締めくくっていた。「長い年月が過ぎた 2020 年になっても、いまだに人種差別がある。テクノロジーの進歩とは違い、人間の思考がどんなに進歩していないことか」と。でも私は、その後の 10 年間で私たち人間がついに、人種差別に対してスヌーズボタンを押すのを止めたと断言できる。今、私は胸を張って言える。「人種差別」という言葉がもはや存在しないばかりか、人種差別という行為自体がなくなった社会に私たちは生きています。

昔の私に向けて何を書いたらいいか考えたとき、いくつか選択肢を検討した。一つ目は、さまざまな形で私に影響を与えた人生の重大事件をいくつか伝えるというもの。ただ、人生という旅でスリルを味わえるのは未知の部分があるからなので、このアイディアはやめることにした。次に、今後数年であな

たが経験することになる失敗を、前もって知らせるというアイデアも考えてみた。けれど、もしもそうした失敗をしなかったら、私は今の私ではなくなるので、これもやめることにした。結局、三つ目の選択肢にした。今はわかっているけれど、もっと前に知っていればよかったと思う教訓を授けるというアイデアだ。

私は天秤のような地球を思い描いて、自分に問いかけた。もしも私たちの性格、性別、人種がすべて同じだったら、世界はどんな感じだろうと。すると頭の中に、全く同じ人間同士が一方の皿にだけ集まり、もう一方の皿には誰もいない状態で片方に傾いた天秤のイメージが浮かんだ。しかし、もしもっと別の人種がいたら、もう一方の皿にも人間が集まるので、バランスの取れた社会が生まれる。言い換えれば、私たちの間に違いがあるから、それぞれに欠けているものを補い合うことができる。私たちの間に違いがあるから、互いを必要とする。

その一方で、もしも自分が不当に扱われている、不当に評価されている、正しく理解してもらえていないと感じたら、その人は天秤に乗ることを拒否することもできる。そうするとバランスが崩れることになるだろう。あなたの役目は、誰もそんな思いをしなくてすむようにすること、あなたたち一人ひとりが正当な扱いを受けるようにすることだ。だからといって、資金集めや抗議運動をしるという意味ではない。私が言っているのは、情熱をこめて声を発すること、あなたの場合であれば書くことによって、そうした考え方を広めていくことだ。